

佐見の森複合センター

—流動する白川の豊かさ—

校庭の空いたスペースはキャンプサイトとして活用し、訪問者が佐見の豊かさを体験する場となったり、小学生たちがキャンプアワーを行う少年自然の家の家業も取り込んだ。製材所から出る木材として活用することで、無駄のないエネルギーの活用を実現することができる。また、毎週水曜日には木工訓練校の実習の場として使われる。大工の伝統技法を学ぶために製材に訪む練習生は時に地域に繰り出し、住民の家のメンテナンスに回る。

南側には土壌養分車がある。二つの要素の一つの屋根の下に落とし込むことで活用の方が建う人々にある境界線を曖昧にし、新たなコミュニティが生まれる。それを実現するためには頭上の空間を抑えながら柱のピッチを大きくすることが重要だと感じた。柱の本数を減らすために、中心にはトラスを用いて南側には上り梁をかけ、北側からは調整張りを採用し、挟み込むようにして支えている。炊事場のランドレベルを少し上げること土壌との空間を自然と分けている。

全長 80m の大空間には製材所や事務所、工房があり、地域の方や訪問者たちは作業の一連の流れをラウンジでくつろぎながら見ることが出来る。柱のピッチは 12m 間隔、その間隔を支えるためにトラスを用いている。連続した大径スチールパイプを軸とすると木材ならではの重量を感じる。鉄骨やアルミとは違った重さで自分自身は囲まれているが不快感はなく、ただ圧迫されず、ここで設計されたものは全て地域で入手できる手法の柱で建てた。地域でとれる資源がどういった過程でどのように活用されているのかをこの場に来ることで肌で実感することができる。

既存の校舎はラウンジと養分車のつながりを持たせるために、一階の導線計画を改善している。二階、三階は既存のまま残し、教室を宿泊教室と改めた。宿泊するときには布団を広げ、教室の中で寝泊まりをすることができる。体育館は既存のまま残し、地域のイベントごとなど、様々な形で活用される。

鉄橋は既存の校舎の北側に増築して建てられる。白川町には道の駅に唯一の自備り温泉施設があった。しかし、コロナの影響により営業が難しくなった為、ここに新たに憩いの場を設ける。製材所から出る木材を活用し、お湯を沸かすことで地域の人々と交流しながら佐見の自然の豊かさを体感し、地域でとれるエネルギーを感じることができる。北側に設計したことにより山の景色や佐見川のせせざり感が感じられる。片流れにすることで目隠しのない空間でも死を多く取り込むことができる。

校舎裏には佐見川が流れている。とても緩やかな流れで濡れた土などがゆっくりと溶け込むことができる。川を挟んだ向い側には遊歩道があり、幅があまり広くないが車道よりは多いように感じる。大きなトラックがこの道を使うこともあるようだ。山の景色を眺めているとトンビの鳴き声が聞こえてくる。季節の変わり目には野鳥たちの存在も感じる。

東断面図 縮尺 1・80

キャンプサイト

炊事場

土場

工房

製材所

ラウンジ

更衣所

鉄湯

佐見川



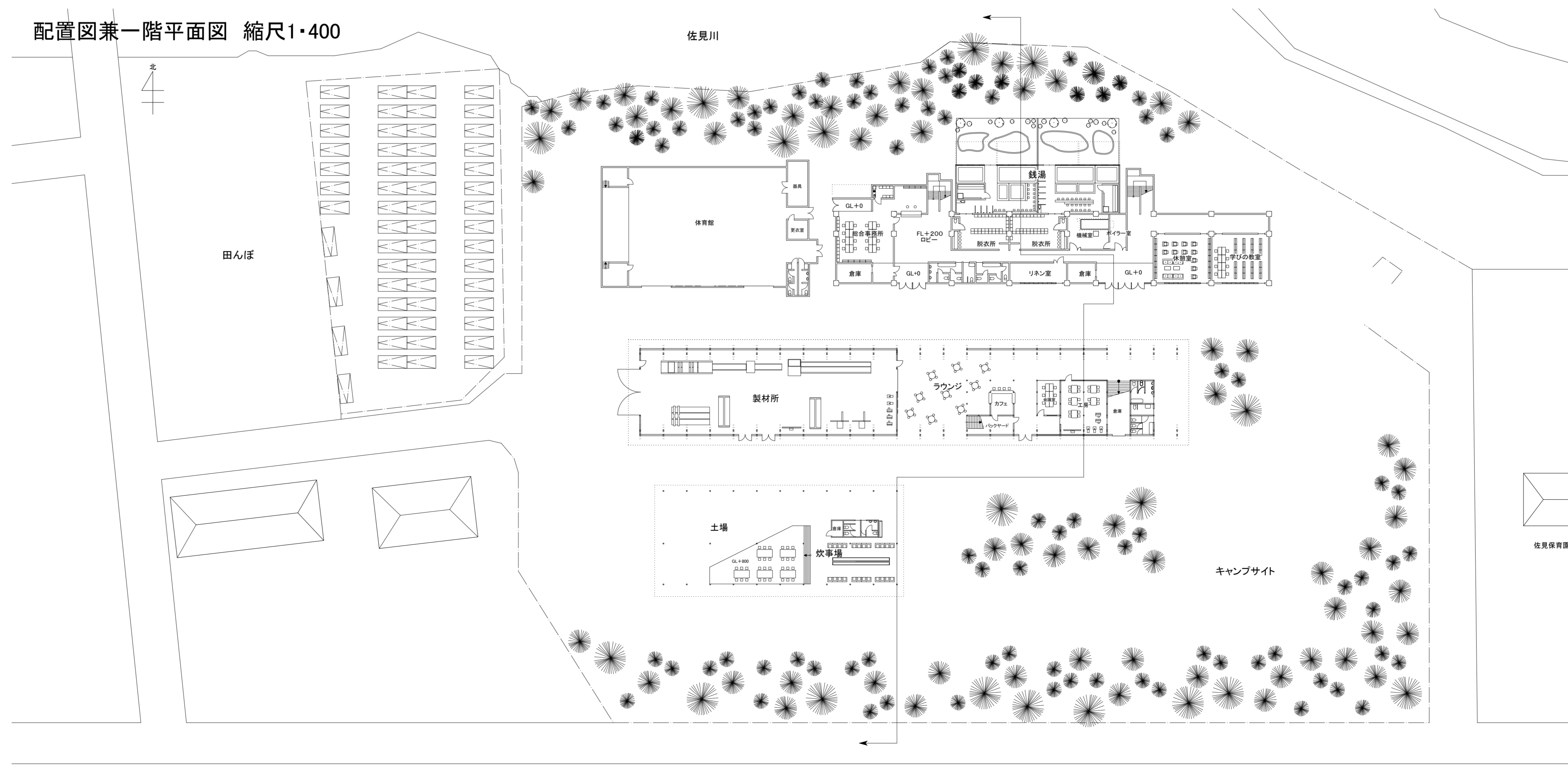
広域ドローイング

岐阜県加茂郡の東部に位置している白川町は西エリアに飛騨川が流れ、そこから佐見川、白川、黒川、赤川が東に向かって伸び、それらの流域に集落が点在している。この町では山林資源が豊かで木材産業が発展している。南部エリアでは東濃ひのき製品流通協同組合がある。町の優良材である東濃松をはじめ県外からも原木が集まり、斫りが行われたり、間伐材の加工、木くずを活用したバイオマス発電など、資源を余すことなく使うための事業を展開させている。

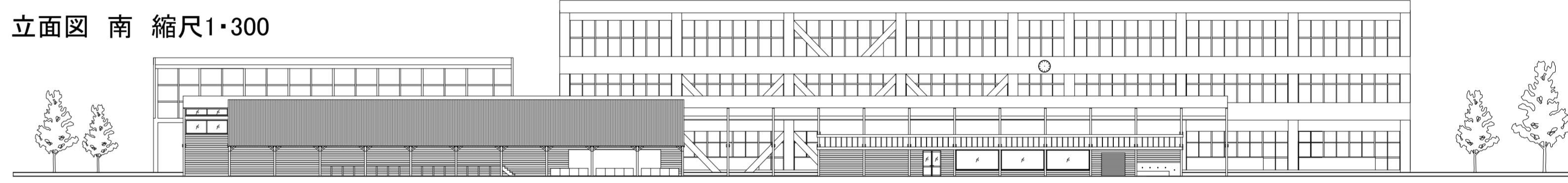
西エリアでは飛騨川に沿って JR 高山本線、国道 41 号が走り、この町でとれた資源を流通させるための導線として使われている。この導線に呼応する形で商業施設も点在している。

北部エリアではとてもどかな景色が広がっている。白川町の豊かな色を強く感じるが、このエリアでのアクティビティは目立たず、過疎化が問題視されている。

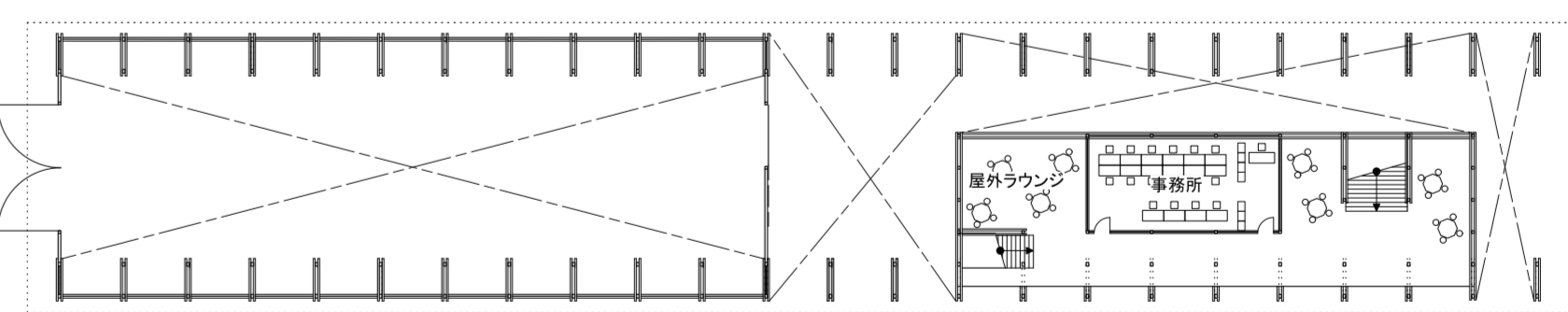
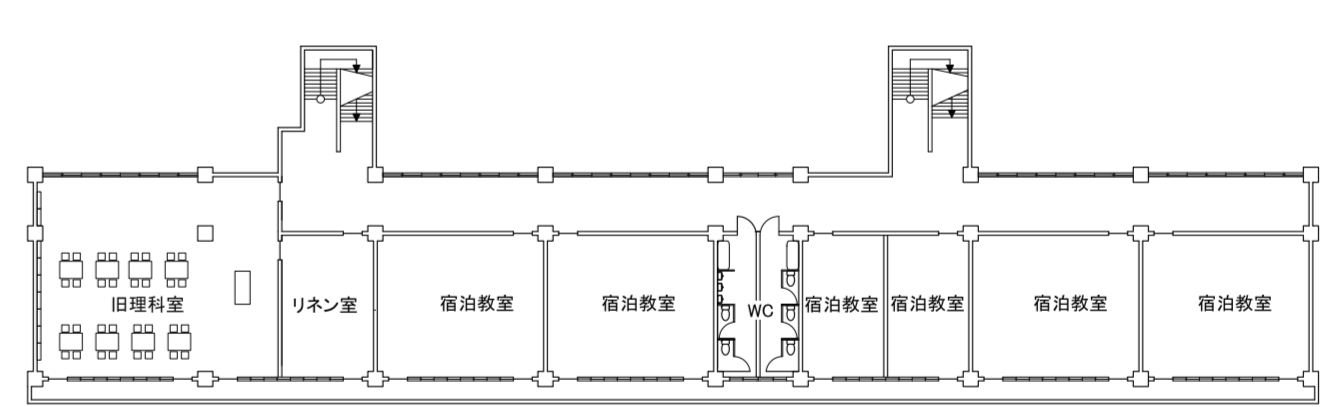
配置図兼一階平面図 縮尺 1・400



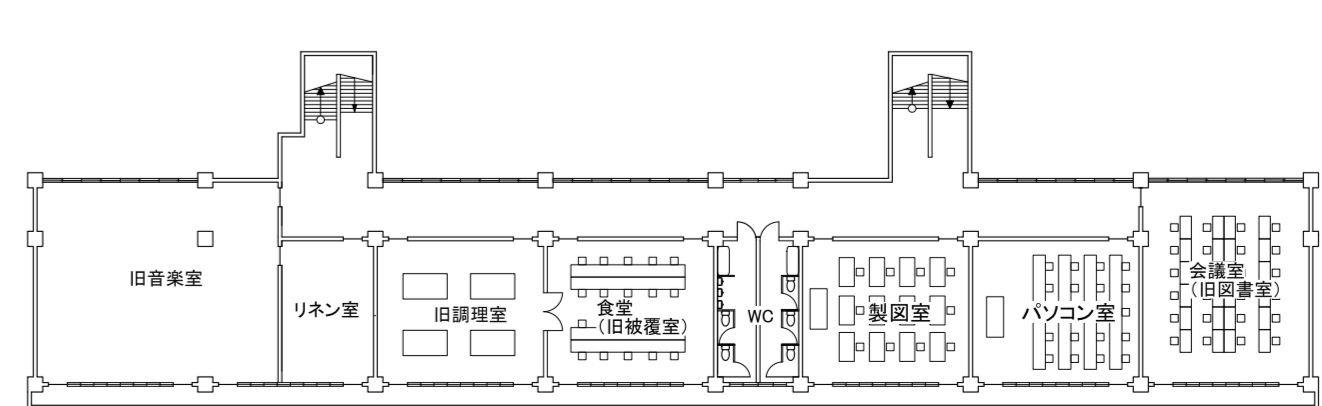
立面図 南 縮尺 1・300



二階平面図 縮尺 1・400



三階平面図 縮尺 1・400



改修前白川小学校 各居室 縮尺 1・400

